様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１６日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19510255
研究課題名（和文）1920 年代から 40 年代におけるフィラデルフィア年会ミッション・ボードと日米関係
研究課題名（英文）The Mission Board of Philadelphia Yearly Meeting of Friends and Japan-US Relations from 1920s through 1940s

研究代表者
戸田　徹子（TODA TETSUKO）
山梨県立大学・国際政策学部・准教授
研究者番号：50183877

研究成果の概要（和文）：
米国プロテスタント日本伝道に関する事例研究として、キリスト友会フィラデルフィア年会ミッション・ボードの戦間期における日本伝道の方針と活動を検証した。太平洋戦争下における日系人強制収容への抗議活動についてボードの書簡資料を紹介する論文と、同ボードと協力関係にあった米国フレンズ奉仕団の日本との関係－関東大震災時の救援活動、排日移民法と日本人留学生基金、太平洋戦争下での日系人支援活動－を概観し、従来ミッション・ボードが担ってきた活動の一部が国際 NGO である米国フレンズ奉仕団の手に移行しつつあったことを指摘する論文を作成した。

研究成果の概要（英文）：
Mainly with the Japan Committee Archives of Philadelphia Yearly Meeting of Friends at the Quaker Collection, Haverford College, this study analyzes the process that the Mission Board of Philadelphia Yearly Meeting of Friends found its own way of foreign work and obtained cooperation from the American Friends Service Committee (the AFSC). After WWI, the tendency of foreign missionary work was clearly away from evangelism and in the direction of humanitarian aid and international goodwill. Philadelphia Friends developed their own missiology, which featured international understanding and fellowship. After the Pacific War broke out, the Mission Board together with the AFSC worked for the Japanese Americans in the United States who were confined in concentration camps. Some of the most important correspondence such as a letter from the Mission Board to the US President are introduced. The AFSC's commitment to Japan is also surveyed in this study. It started in 1923 when the AFSC gave emergency aid to Japan in the aftermath of the Great Kanto Earthquake. It has included responses to the Exclusion Act and the interned Japanese Americans as well.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：海外伝道、キリスト友会、フィラデルフィア年会、ミッション・ボード、米国フレンズ奉仕団、排日移民法、日系人強制収容 (Foreign mission, the Society of Friends of Christ, Philadelphia Yearly Meeting, Mission Board, the American Friends Service Committee, Exclusion Act, Japanese American Relocation)

１．研究開始当初の背景

プロテスタント外国伝道の研究において、宣教師あるいは伝道協会と政治の関係はしばしば取り上げられる古くて新しいテーマである。日米関係の分野でも近年、排日移民法反対運動における宣教師の役割や超教派で実施された日米人形交流事業などが注目されている。第一次世界大戦以降、日米関係が悪化する時代、ミッションという民間セクターは日米の問題にどのように取り組み、どのような足跡を残したのだろうか。さらに、このような活動はどんな伝道観に裏打ちされたものだったのか。これらの課題を考えるにあたっては、在日宣教師ばかりでなく、それを支持した伝道協会の動向も検証すべきであろうし、短期的なプロジェクトばかりでなく地味ながらも継続的に行われていた日米交流事業も研究対象に加える必要がある。また政治上は顕著な効果はなかったものの、このような日米親善・交流活動に関わることによって外国伝道支持者の内面に生じた変化も興味深い。ミッションと日米関係の関連性はより広範でより長期的な展望において検討されるべきである。本研究は以上の問題意識に基づき戦間期の両者の関連性を検証しようとするものである。

２．研究の目的

(1) 研究の全体構想は、米国によるプロテスタント日本伝道の関心がキリスト教伝道と教育から、青年事業や平和運動、日米親善・交流、そして太平洋戦争下と占領期においては人道支援活動へと変化したことを実証し、その活動が民間セクターとして日米関係に果たした役割を明らかにすることにある。

(2) これを検証するにあたってはフィラデルフィア・フレンドの外国伝道活動を取り上げ、彼らが結成したミッション組織の変遷を辿り、各時代の伝道観と活動内容の違いを解明している。小教派ではあるがリベラルで、日米友好の橋たらんとした新渡戸稲造や日本占領政策に大きな足跡を残したヒュー・ボートンを輩出した宗教グループの活動を長期的な時間枠で追うことで、米国の宣教師と彼らを通して形成された親米派・親日派の人脈が日米友好に果たした貢献が解明できると考えられる。

(3) 今回の研究では、調査対象をミッション・ボード（1923－46）に限定した。事前調査でボードの年報に目を通したところ、伝道意識については、国際親善と国際協力を重視する方針を採るようになったことが確認できた。この新しい伝道観に基づき、1920 年代から 40 年代にかけて日米関係が悪化の一途をたどる時代に、ミッションが具体的にどのような活動を展開したかを明らかにすることを、本研究の具体的な研究課題とした。

３．研究の方法

(1) 日本においてフレンド（別名クエーカー、教会名はキリスト友会）伝道は 1886 年に始まり、東京と茨城を中心に展開された。この日本伝道を開始し財政的に支えたのはキリスト友会フィラデルフィア年会であった。米国ハバフォード大学クエーカー・コレクションが所蔵する同年会のミッション資料は 1880 年代から 1970 年代に及ぶフィラデルフィア・フレンドの外国伝道支援活動と日本フレンド伝道に関する記録を網羅している。まずはこの資料のうち未見であった 1920 年代から 40 年代にかけての機関紙と書簡を調査した。

(2) さらに同コレクションが所蔵する宣教師文書のうち、ギルバート・ボールズとエスター・ローズのファミリー・ペーパーを調査した。

(3) (1)(2)で網羅できなかったトマス・エルザ・ジョーンズ関係の資料を、アーラム大学フレンズ・コレクションで調査した。

(4) 第一次世界大戦後のミッション活動は超教派組織または世俗的組織との協働関係において遂行されることが多かった。それゆえ宣教師たちと協働関係にあった組織の情報が不可欠となる。本研究ではミッション・ボードとの提携組織として米国フレンズ奉仕団に着目した。この組織の年報、リーフレット、パンフレットなどを収集した。

(5) 以上を内容とする現地調査を3年の研究期間中に6回実施した。調査で入手した資料を、特に排日移民法反対運動と日系人強制収容問題を中心に整理、精読した。調査対象期間について、ミッション・ボードの海外伝道政策の展開と具体的な活動を検証するとともに、同機関と協力関係にあった米国フレンズ奉仕団の日本に関係する活動について概要をまとめた。さらに日米関係史において特に重要と思われる資料を紹介した。

４．研究成果

(1) 在米ミッション資料を用いた研究のほとんどが明治期を対象としているのに対し、本研究は学問的蓄積の少ない 1920 年代から 1940 年代に焦点を絞り、この時代の米国プロテスタント日本伝道の特徴を解明しようとした。その結果、初期の段階ではミッション・ボード内に伝道観の対立が存在したものの、次第に国際親善と国際協力を強調するようになったことが明らかになった。一方で、これまでミッション・ボードが担ってきた活動の一部が米国フレンズ奉仕団のような国際 NGO の手に委ねられるようになった事実も判明した。この時期、米国の民間セクターによる海外活動がミッションから宗教色をもたない国際 NGO に移行しつつあったことは、本研究から得られた新たな知見であると言える。論文としての研究成果は以下の 3 点が挙げられる。

(2) 「フィラデルフィア年会ミッション・ボード　資料紹介(1)：日系人強制立退き・収容への抗議(大統領への書簡等)

日米戦争下におけるフィラデルフィア・フレンドの日系人支援活動の内容を解明する作業の手始めとして、フィラデルフィア年会ミッション・ボードが日系人の強制立退きに抗議して米国大統領送った書簡とその後に政府高官とやり取りした書簡を、ミッション・ボード議事録とボード関係者の情報を補った解題を付して紹介した。具体的には以下の 5 通の書簡である。

①1942 年 5 月 20 日、ジョン・F・リッチ（フィラデルフィア年会ミッション・ボード副委員長)、フランクリン・D・ルーズベルト（米国大統領）宛て書簡
②1924 年 5 月 26 日、ヘンリー・L・スティムソン（陸軍長官)、ジョン・F・リッチ宛て書簡
③1942 年 6 月 9 日、J・パスモア・エルキントン（フィラデルフィア年会ミッション・ボード委員長)、ヘンリー・L・スティムソン宛て書簡
④1942 年 7 月 9 日、ヘンリー・L・スティムソン、J・パスモア・エルキントン宛て書簡
⑤1942 年 7 月 20 日、J・パスモア・エルキントン、ヘンリー・L・スティムソン宛て書簡

フレンドは会衆派やブレスレン派と並んで早い段階から日系人に援助の手を差し伸べたと言われてきた。しかしながら書簡の日付から分かるように、強制立退き・収容への抗議はかなり遅れ、ほとんど実効性のない時期に提出されている。サンドラ・C・テイラーは、教会の日系人の強制立退き・収容への対応を３段階―１）真珠湾攻撃から強制立退き・収容の命令が出されるまでの期間　２）立退き・収容期　３）収容所を出たあとの再定住期―に分け、アメリカの教会が最初の段階で無策であったことを批判しているが、ここで紹介している資料は少なくとも時期的な観点からすれば、その傾向を裏書する結果となった。

(3) 「米国フレンズ奉仕団と日本（１)」

米国フレンズ奉仕団（the American Friends Service Committee、以下 AFSC と略記）はプロテスタント教派の一つであるフレンドによって、良心的兵役拒否者に戦闘行為に代わる仕事を提供することと、ヨーロッパの戦後復興に貢献することを目的として、第一次世界大戦中の 1917 年に創設され、後に宗教色抜きの国際 NGO（非政府組織）に発展した。結成以来、フィラデルフィアに本部を置き、人道支援や平和運動、人種平等を求める活動を米国内外で展開している。今日存在する数ある NGO の中でも赤十字についで長い歴史を持ち、1947 年には第二次世界大戦下の救援活動と戦後復興活動によりノーベル平和賞を英国フレンズ協議会とともに受賞した。日本に活動拠点は置かれておらず、現在ではその名前を耳にすることはほとんどないが、終戦後の一時期、日本の復興を助けた NGO として相応の評価と知名度を得た組織であった。

本研究では 1920 年代から 1940 年代のフィラデルフィア年会ミッション・ボードの日本関係資料を収集したが、その中には AFSC と

の協同活動を示す記録が多く含まれていた。2 つの組織の幹部は重複しており、日米関係が悪化する戦間期、この 2 つの組織は日本に関する情報を共有し、日米交流事業を展開した。AFSC が果たす役割は次第に大きくなっていき、戦時下の日系人強制収容問題ではむしろ AFSC が主導的立場になっている。

AFSC の海外活動は第一次世界大戦後しばらくはヨーロッパに限定されていたが、次第に他地域に拡大する。その契機になったのは日本の関東大震災であり、東アジア情勢だった。その意味では、AFSC の歴史において日本との関係は活動対象地域拡大の起点として検証を要する課題でもある。フィラデルフィア・フレンドと日米関係の全体像を把握するためには、この組織の調査研究も不可欠であることから、太平洋戦争までの AFSC と日本の関係を以下の構成で概観した。

①米国フレンズ奉仕団の結成
②関東大震災と日本フレンズ奉仕団の結成
③排日移民法と日本人留学生基金
④太平洋戦争下の米国フレンズ奉仕団

親日的な NGO として日米関係史や日系米国人研究にしばしば登場する AFSC であるが、その本格的な研究は日本でまだ試みられてはいない。本論は別組織の資料調査過程で副次的に得られた資料を基に AFSC について概説したものにすぎず、系統的な研究とは到底いえない。しかしながら本論作成を通して以下に述べるような新たな課題や疑問が浮上してきた。一つはトマス・ジョーンズの貢献である。日本滞在期間が 7 年と他の宣教師と比較して短期だったせいか、トマス・ジョーンズの貢献はあまり明瞭ではなかった。来日前に、彼はヤング・フレンズ運動や AFSC 活動に関わっており、その関心や問題意識、メソッドがほぼ同時代的に日本に伝えられた可能性があり、その視点からフレンド日本伝道を検証する必要があると思われる。第 2 点目として、AFSC が独自な企画として日本人留学生基金を立ち上げた事実が判明した。これが含蓄するところは、排日移民法への反応が日米人形親善以外にも存在し、教派、超党派、国際 NGO のレベルで展開された可能性である。個別教派や YMCA などの超教派組織ごとの独自な取り組みの有無を、資料に分け入って確認すべきであろう。最後に、太平洋戦争下の日系人問題については、AFSC 本部が掌握していた活動は存外少なく、現場主導で日系人支援活動が展開していた可能性が高いことが分かった。このことは日系人支援活動が各地域に根ざした活動として検証されるべき研究課題であることを示唆していると言える。

(4) “Conflicting Views on Foreign Missions: The Mission Board of Philadelphia Yearly Meeting of Friends in 1920s”

3 つ目の論文として、ミッション・ボードの海外伝道政策の展開に関する英語論文を作成した。フィラデルフィア年会ミッション・ボードの初期段階（概ね 1920 年代）の組織と財政を分析し、支持者が少数だったため、ボードが直面した財政問題を解明した。さらに財政問題と世代間対立のゆえに、国際親善と国際協力を重視し、サービス型の国際貢献を志向しながらも、このボードが教派による日本伝道という拘束から逃れられない状況にあったことを論じた。これについては米国のクエーカー史の学術専門誌に投稿し、審査員の指示に沿って修正中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 戸田徹子 「米国フレンズ奉仕団と日本（１）」『山梨国際研究』、5 号、73－82 頁、2010、査読有

② 戸田徹子 「フィラデルフィア年会ミッション・ボード 資料紹介（１）：日系人強制立退き・収容への抗議（大統領への書簡等）」『山梨国際研究』、4 号、97－108 頁、2009、査読有

６．研究組織

(1)研究代表者

戸田 徹子（TODA TETSUKO）
山梨県立大学・国際政策学部・准教授
研究者番号：50183877